

# 点描

## 教団問題 公議公論を求めて

### 分裂報恩講余波(下)



全国同朋代表者集会の様態を伝える『同朋新聞』1980年6月号

「分裂報恩講」によって宗門内部に生じていた溝は、報恩講執行後に顕著に表面化した。

一九八〇年(昭和55)『同朋新聞』二月号は、「異常な本山報恩講に思うこと」と題して、門徒・僧侶から寄せられた意見を紹介している。警備についた門徒から「警備の行動に悔いなし」という意見が寄せられた一方で、「警備の目的は何なのか、総括会議を開催せよ」との批判的な意見も掲載されている。

総括を求める理由の一つとして、「異常な姿の中に真の法要のあり方が見られた。これこそ実に同朋会運動の成果である。しかし、当局が自信をもってそう言い得るのであれば、なぜ総括会議を開かないのか。報恩講を総括する同朋会議を中央でも各教区でも開催し、今後の運動の糧とせぬのか」と、真宗同朋会運動の展開の問題として問いかける。

このような状況を見据えて、一九八〇年(昭和55)四月、「全国同朋代表者集会」が開催され、教務所長をはじめ、教区会議長や門徒評議員など百二十名が本山に集

った。

嶺藤亮総長は、「この問題が宗門に与えた影響は少なからぬものがありました。それに対してのご批判の言葉をいろいろうけたまわっておるのでありますが、何卒、忌憚のないご意見・ご批判で結構でありますから、充分お聞かせを頂き、今後のあるべき方向に向かって、間違いない道を辿りたい」と述べて開会した。

集会では、各連区を代表して実際に警備についた門徒評議員が問題提起を行った。これを受けて、自教区に戻って「報恩講報告会」を行い、住職抜きで門徒自身の手で門徒大会を開催したことや、群生舎等からの批判、真宗教学研究所員の「運動と名づけられる同朋会運動はもはや終わったのではないか」の発言等を問題視する討議が交わされた。

批判的な意見が相次ぐ中、日野賢懐北海道教務所長は、「群生舎等の意見が出るところには、私はまだまだ教団は生きていくということを感じます。そしてだからこそ、何でも言える自由さをもっている真宗大谷派という、こんな教団はちよつと他にないんではないかということも思っております。やはり、そこに私は同朋会運動の一つの願いがあり、成果があると思います」と述べた。

分裂報恩講を契機として、真宗

同朋会運動は岐路に立った。

宮城顕教研究所長は、分裂報恩講を総括する中で、「一人の御同朋を大事にするということを経んじて、しかも御同朋ということをお口にしていたのではないか」と表明し、辞任されていくこととなる。

しかし、宮城氏の姿勢は後年も揺れることはなかった。「御同朋・御同行」という言葉は、決して念仏者どうしの領き合いの言葉ではない。往々にして、いわゆる真宗同朋会運動というものも、いかにして輪をひろげるか、御同朋と領き合える人間をいかに増やしていくかと、そういうこととして私たちが取り違えてきたのではないか。念仏者とは一切衆生を御同朋として見出していく。念仏者が御同朋なのではない。念仏の集いが御同朋なのでもない。念仏者とは一切衆生、一切の人間を御同朋として見出していく、そういう心をとまわつたものであり、その歩みを開かれたものというべきではないか(一九九九年第二回真宗本廟育成員研修会)と言いつけられている。

私たちは、意見が対立し異なる生き方をする人に対して、どのような眼を持ってきたのか。

真宗同朋会運動五十年を迎える今年、いかなる再出発を期そうとするのか。これからは、これまでを決めるのである。

(速水 馨)

# 1980 昭和55年